

## ものづくり産業を支える仲間たち⑮

基幹労連—  
三菱重工横浜製作所

今回は、三菱重工横浜製作所を訪問し、これからのクリーンエネルギーとして有望視されている風力発電用の風車づくりの現場を見せて頂いた。

横浜製作所の歴史は古く、設立は明治24年(1891年)の(有)横浜船渠として船舶修理業を始めたことに遡るから、115年の歴史を持っている。その後、新造船、機械製品に進出し、昭和10年三菱重工と合併した。昭和41年本牧工場を新設、昭和57年に横浜市の新設事業“みなとみらい21計画”に協力するため、明治以来の横浜工場を本牧工場とさらに新設の金沢工場に移設した。そして、所名も昭和58年4月に横浜造船所から横浜製作所に改称した。

「みなとみらい21」の玄関口にそびえる横浜ランドマークタワーの敷地内には、今もその名残がある。日本に現存する商船用石造りドックとしては、もっとも古い「旧横浜船渠第2号ドック」を復元して生まれたのが、今若者に人気のある音楽コンサートやコミュニケーションスペースとして利用されている「DOCKYARD GARDEN (ドックヤードガーデン)」である。

また、横浜製作所の史料コーナーを見せていただいたが、横製ゆかりの文学者として、吉川英治氏や内館牧子さんらの写真や生原稿のコピーが展示されていた。

横浜製作所は、その時代や社会のニーズに応じて、事業構造の転換を繰り返してきており、昭和55年には歴史ある新造船から撤退。そして鉄構製品、原動機、環境装置、修繕船を主力とした事業へと発展を遂げてきた。

今回、見学させていただ

いた風力発電用の風車は、もともと三菱重工長崎造船所で開発製造しているものを、2006年10月から本牧工場でも生産を開始し、増産体制に入っている。

風車は、翼(ローター)とそれを支える支柱(タワー)、そして、ローターとタワーの接続部分に位置する風車の

心臓部であるナセルの3点から成っている。ナセルには、翼を回転させて電力を起こす発電機、増速機、主軸、制御装置などが格納されている。

本牧工場では、主力製品である風力発電機MWT-1000Aの心臓部ナセルを製造している。表紙イラストは、3本の翼を連結するローターヘッドを加工している作業工程である。長さ30m近い翼と主軸との接合部分を支えるローターヘッドは、重要部分であり、ボルトの一本一本にも慎重さが求められる。また、特に技術を要する工程は、ナセル内部の発電機と増速機、主軸受けと主軸を貫く部分を一直線に固定する作業工程であり、寸分の狂いも許されない高度な技術が要求される。

製品のほとんどは、工場の岸壁から船で運搬される。高速道路で10分くらいのところにある金沢工場には、本牧工場の主力製品であるMWT-1000Aの上位機種に当たる2.4MW機の実証機が、実際に稼働しているとのことなので、高橋支部書記長に車で案内していただいた。

風車と言っても、並みのサイズではない。3枚の翼の各長さは45m、直径は、92m近くにもなり、支柱の高さは70mもある。横浜ランドマークタワーの前にある大きな観覧車がすっ



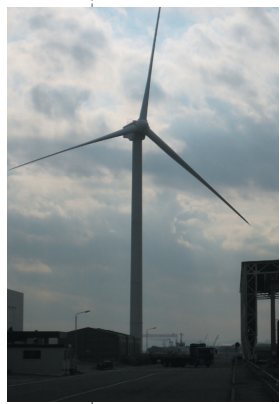
ナセルの頭部カプセルの組立作業

ぽり入ってしまうほどのことである。

残念ながら、ちょうど三菱マークの形で運転は休止中であったが、近くで見ると、とてつもなく巨大で、写真に入りきらない。車で構内の少し離れたところまで行ってもらい、ようやくカメラに収まった。

この風車は、風速3m/s以上の風が吹けば、翼を回転させ、発電できる構造になっているとのこと。しかもコンピュータ制御によって、もっとも適切に風を受ける方向に翼の向きを変えられるように設計されている。また、風速25m/s以上になると止まり、待機状態になる。風車自体の構造は風速70m/sの暴風にも耐えられるよう設計されている。

風車を製造している本牧工場の壁には、「横製に生まれた新しい風!」、「自ら変革し、自ら前を向き、明日に輝く横製を築こう」とのスローガンが。まだ、スタートしたばかりの横浜の風車部門であるが、今まで培ってきた技術と抜群のチームワークで、たくましく明るく働いている姿が印象的だった。(美)



天空に三本の翼を広げる風車

from  
EDITORS

◆今号の特集では、「ものづくり現場から若者雇用を考える」を取り上げた。昨年10月末に同様の

テーマで開催した政策セミナーの講演・報告のエッセンスを各講師・報告者の方に執筆いただき、掲載した。それに加えて、三菱重工労組名航支部と関東自動車労組岩手支部にご協力いただき、現地取材を行い、インタビュー形式で、現場の人事担当者や組合役員、そして、当の若者労働者の方に直接インタビューを行い、その内容を載せた。今、ものづくり現場で働く若者は、ものづくりについてどう考えているのか、働きがいとはどんな時

に感じるのか等々聞いてみた。

◆『若者はなぜ3年で辞めるのか?』という本が話題になっているが、どっこい、今回訪問したものづくり現場の若者労働者は、そうではなかった。3人の若者労働者は、それぞれものづくりへの情熱と夢と働きがいを持っていた。これからの日本のものづくり産業を支えてくれる若者労働者にエールを贈り、みんなで育てていきたいものだ。(美)

WINTER  
issue  
[冬号]